

令和 5 年 5 月 23 日現在

機関番号：32665

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2022

課題番号：19K11518

研究課題名(和文)五輪報道における多様性の検証とその変遷に関する研究：北京五輪から東京五輪へ

研究課題名(英文) A study examining diversity and its transition in Olympic coverage: From the Beijing Olympics to the Tokyo Olympics

研究代表者

中正樹 (NAKA, Masaki)

日本大学・法学部・准教授

研究者番号：70388685

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東京五輪の開催期間にNHKおよび在京放送局のキー局の代表的なニュース番組が提供したすべてのニュースを内容分析することを通じて、報道量の観点からその報道傾向を明らかにし、東京五輪の報道が可視化したもの/不可視化したものを明らかにすることに取り組んだ。その際、東京五輪のビジョンとして示された基本コンセプトの一つである「多様性と調和」に注目した。また、その内容分析の結果を、過去に開催された北京五輪(2008)、ロンドン五輪(2012)、リオ五輪(2016)における同様の内容分析の結果との比較を通して、日本のニュース番組における五輪報道およびテレビニュースの変化について考察した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究において、研究代表者らは北京五輪から東京五輪に至る連続する4つの五輪のテレビニュース報道を対象として、量的・質的な内容分析に取り組んだ。五輪開催がテレビニュースの内容に影響を与える可能性を考慮するならば、単独の五輪報道よりも複数の五輪報道を研究対象とした方が、比較検証を通してより深く考察できることは自明である。また、本研究は東京五輪という「点」ではなく、北京五輪から続く「線」の視点から五輪報道に取り組んだことで、従来の研究では成し得なかった考察を可能にした。同時に、本研究はテレビニュースに関するパネル調査としての性格も有しており、複数の学術的領域に対して意義のある研究になったと考える。

研究成果の概要(英文)：Through a content analysis of all the news provided by NHK and the representative news programs of the major Tokyo broadcasters during the period of the Tokyo Olympics, this study sought to clarify coverage trends in terms of volume of coverage and to identify what was visible/invisible in the coverage of the Tokyo Olympics. The focus was on "Diversity and Harmony," one of the basic concepts presented as the vision for the Tokyo Olympics. The results of the content analysis are compared with the results of similar content analyses of the previous Olympic Games in Beijing (2008), London (2012), and Rio (2016) to examine changes in Olympic coverage and TV news in Japanese news programs.

研究分野：ジャーナリズム

キーワード：テレビ ニュース オリンピック 内容分析 多様性

1. 研究開始当初の背景

メディア研究分野で五輪が取り上げられるようになったのは、1980年代になってからである。それまで、五輪は原則として欧米を中心とする先進国で開催されるイベントであり、そのイデオロギーを発展途上国に「一方的に」伝達する機能を果たしていた。しかし、そうした文化帝国主義的側面はやがて問題視されるようになった。

以上のような情報の国際的な流れの不均衡への注目に加えて、テレビによる五輪視聴に関する研究への関心も高まった。五輪はメディア・イベントの最たるものと定義され、マス・メディアに媒介された現代社会の祭礼として機能する側面が注目されるようになった。

研究代表者らも五輪報道が視聴者に与える影響に注目し、日本のテレビニュース番組が五輪を報道するにあたりどのようなフレームを用いているのかに着目して研究に取り組んできた。具体的には、北京五輪、ロンドン五輪の開催期間に報道されたテレビニュースを内容分析することを通じて、そこに内在する価値観を明らかにしてきた。そして今回、研究対象として注目したのが2020年に開催が予定されていた東京五輪である。

同大会のビジョンとして示された基本コンセプトの一つに「多様性と調和」がある。大会のウェブサイトではこれを「人種、肌の色、性別、性的指向、言語、宗教、政治、障がいの有無など、あらゆる面での違いを肯定し、自然に受け入れ、互いに認め合うことで社会は進歩」することを示す概念として説明している。

しかし、世界ではこのコンセプトに逆行するような出来事が頻発している。人種差別、性差別、移民排斥などの話題は尽きず、分断と対立の時代へ向かっているかのようである。このような社会情勢において、テレビは偏向せず多様性を持って報道する役割が期待されている。とりわけ、国同士の競争、そして人種や性別の違いが強調されがちな五輪報道においてそうした役割を果たすことは特に重要であると考えらる。

以上のような問題意識のもと、本研究では研究課題の核心をなす学術的「問い」として「東京五輪報道における多様性の検証」を設定した上で、東京五輪の開催期間にNHKおよび在京放送局のキー局の代表的なニュース番組が提供するすべてのニュースを対象に量的分析することを通じて、報道量の観点からその報道傾向を明らかにし、その結果をもとに東京五輪の報道が可視化したもの／不可視化したものを明らかにすることに取り組むこととした。

2. 研究の目的

本研究の目的は、3つある。第1に、東京五輪のビジョンとして示された基本コンセプトの一つである「多様性と調和」が、テレビニュースとしてどのように報道されたのかを検証することである。第2に、東京五輪の開催期間におけるテレビニュースの多様性にまつわる価値観に注目し、それらがどのように報道されたのかを検証することである。第3に、北京五輪から東京五輪に至るまで、五輪の開催期間におけるテレビニュースの価値観がどのように変化してきたのかを解明する。

3. 研究の方法

[令和元年度]

東京五輪の開催期間におけるテレビニュースの多様性を検証する前段階として、過去の五輪開催期間におけるテレビニュースの多様性を検証する。研究代表者らはこれまで、北京五輪とロンドン五輪におけるテレビニュースを内容分析し、その結果を報告書にまとめている。本年度はリオデジャネイロ（以後、リオ）五輪におけるテレビニュースの内容分析に取り組み、その結果を報告書にまとめ、それらの多様性を検証する。

[令和2年度]

東京五輪の開催期間にNHKおよび在京放送局のキー局の代表的なニュース番組が提供するすべてのニュースをコーディングする。

対象期間は、五輪開会式4日前の2020年7月20日から五輪閉会式4日後の2020年8月13日までの計25日間である。このとき、分析対象となるテレビニュース番組は「NHKニュース7 (NHK)」、「ニュースウオッチ9 (NHK)」、「news zero (日本テレビ)」、「news23 (TBS)」、「Live News α (フジテレビ)」、「報道ステーション (テレビ朝日)」の6番組である。これらの番組で放送されたすべてのニュースが、コーディングの対象となる。

録画したニュースのコーディングにあたっては、研究代表者らがこれまで開発・改良を重ねてきた内容分析の手法を用いる。具体的には、各ニュースに対して「日付」「放送局コード」「ニュース時間」「タイトルテロップ」「ニュースの発生地」「ニュースの分野」「日本(人)への言及・発言および映像」といった分析項目にまつわる情報をコーディングシートに記入していく。コーディングは、十分に訓練を積んだコーダーが実施する。

[令和3年度]

前年度にコーディングしたデータを内容分析することで、テレビニュースの量的・質的な傾向を把握する。コーディングしたデータに統計的処理を施して、量的分析を加える。これが基本データとなる。これにより、東京五輪報道の量的な傾向を抽出する。続けて、量的分析の結果を参考として、研究代表者らのそれぞれの研究分野（ジャーナリズム、スポーツ・メディア、エスニシティ、ジェンダー）の観点から質的分析を加える。

[令和4年度]

これまでに得られた知見をもとに学会や研究会において、研究成果を公表する。また、研究代表者らが自らの研究分野にしたがって論文を執筆するとともに、共同で報告書を執筆する。

4. 研究成果

[令和元年度]

本年度はまず、リオ五輪を対象として、同五輪の開催期間にNHKおよび在京放送局のキー局の代表的なニュース番組が提供するすべてのニュースを対象としてコーディングを実施し、内容分析を実施した。その上で、その内容分析の結果とこれまでの北京五輪、ロンドン五輪における同様の内容分析の結果を比較検討し、知見を得た。具体的には、開催期間におけるニュースをその本数、放送時間を単位として、ニュースの発生地、ニュースの分野について量的に内容分析した。また、開会式におけるニュースを対象として質的に内容分析した。以上の研究成果は、2020年3月に報告書として刊行予定であった。しかし、新型コロナウイルスの感染拡大による混乱の影響を受けて編集作業の遅れを余儀なくされた。その結果、2019年度の刊行を見送ることになり、2020年5月に刊行された。

また、ジェンダーおよびダイバーシティの分析を担当する小林は、本研究から得られた知見をもとに第22回ジェンダー問題調査・研究報告会にて「SNS時代におけるオリンピック報道：選手のダイバーシティはいかに表象されたか」と題した発表を行なったほか（2019年7月、於北九州市立男女共同参画センター・ムーブ）、2019年度人権問題研究会公開シンポジウムでも「オリンピックニュースとジェンダー：日本の報道傾向と問題点」と題する招待講演を行なった（2019年11月、於関西大学）。

[令和2年度]

本年度は、東京五輪の開催が予定されていた。そして、同五輪の開催期間にNHKおよび在京放送局のキー局の代表的なニュース番組が提供するすべてのニュースを対象としてコーディングを実施し、内容分析を実施する予定であった。しかしながら、新型コロナウイルス禍によって同五輪が延期された結果、それらの研究に取り組むことができなかった。

そこで前年度に取り組んだリオ五輪の内容分析から得られたデータを元に、五輪開催国報道に焦点を絞り、それらを考察することを通じて得た知見を論文「五輪開催期間におけるニュース番組の開催国報道：リオ五輪を事例として」（『ジャーナリズム&メディア』No.15）にまとめた。また、ジェンダーおよびダイバーシティの分析を担当する小林は、本研究から得られた知見を論文「ナショナリズムとジェンダーの交差」（『体育の科学』vol.70）および論文「オリンピックニュースとジェンダー：日本の報道傾向と新たなコミュニケーションの構築に向けて」（『関西大学人権問題研究所紀要』第80号）にまとめた。

[令和3年度]

本年度は、1年遅れで東京五輪が開催され、本来は前年度に予定されていたテレビニュースに対するコーディングを実施した。具体的には、東京五輪の開催期間に日本のキー局（NHK、日本テレビ、TBS、フジテレビ、テレビ朝日）が提供する代表的なニュース番組のすべてのニュースを録画し、それらに対するコーディングを実施した。

本年度の研究成果としては、比較対象事例としてのリオ五輪、北京五輪、ロンドン五輪における五輪開催国報道の報道内容を比較検討することを通じて得た知見を論文「五輪開催期間における日本のニュース番組の報道傾向：北京五輪・ロンドン五輪・リオ五輪報道の比較から」（『政経研究』第58巻第3・4号）にまとめた。また、ジェンダーおよびダイバーシティの分析を担当する小林は、本研究から得られた知見を論文「オリンピックにおけるアスリートの表象と制作者のダイバーシティ」（『生活労働施策』No.299）にまとめた。

[令和4年度]

本年度は、これまでの分析結果を取りまとめ、それらを論文および研究報告書のかたちで公開することを目指し、それらの執筆、編集に取り組んだ。

研究成果としては、東京五輪の開催期間における代表的なテレビニュース番組が提供したニュースの分析を通じて、報道されたこと、報道されなかったことを考察する論文「東京五輪開催期間における日本のテレビニュース報道：報道が可視化したもの/不可視化したもの」（『ジャーナリズム&メディア』No.20）にまとめた。また、東京五輪に関する出来事、テレビニュース、そして新聞報道について総合的な見地から分析した結果をまとめた報告書『東京オリンピック開

催期間における日本のテレビニュース報道』(国際テレビニュース研究会)を刊行し、そしてメディア関係の研究者に配布した。

さらに、ジェンダーおよびダイバーシティの分析を担当する小林は、本研究から得られた知見をもとに外国語教育メディア学会中部支部第98回大会にて「ニュースのジェンダー・バイアス: 東京オリンピック2020から考える」と題する招待講演を行なったほか(2022年7月、於中京大学)、第21回日本スポーツとジェンダー学会でも「東京2020メディアが覆い隠したもの」と題する招待講演を行なった(2022年7月、於中京大学)。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 2件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 中正樹・日吉昭彦・小林直美	4. 巻 20
2. 論文標題 東京五輪開催期間における日本のテレビニュース報道：報道が可視化したもの/不可視化したもの	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 ジャーナリズム&メディア	6. 最初と最後の頁 11-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中正樹	4. 巻 第58巻第3・4号
2. 論文標題 五輪開催期間における日本のニュース番組の報道傾向：北京五輪・ロンドン五輪・リオ五輪報道の比較から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 政経研究	6. 最初と最後の頁 25-60
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林直美	4. 巻 No.299
2. 論文標題 オリンピックにおけるアスリートの表象と制作者のダイバーシティ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 生活経済政策	6. 最初と最後の頁 12-19
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中正樹・日吉昭彦・小林直美	4. 巻 15
2. 論文標題 五輪開催期間におけるニュース番組の開催国報道：リオ五輪を事例として	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ジャーナリズム&メディア	6. 最初と最後の頁 45-58
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林直美	4. 巻 80
2. 論文標題 オリンピックニュースとジェンダー：日本の報道傾向と新たなコミュニケーションの構築に向けて	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西大学人権問題研究所紀要	6. 最初と最後の頁 2-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 小林直美	4. 巻 70
2. 論文標題 ナショナリズムとジェンダーの交差	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育の科学	6. 最初と最後の頁 357-361
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計4件（うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小林直美
2. 発表標題 東京2020メディアが覆い隠したもの
3. 学会等名 日本スポーツとジェンダー学会第21回記念大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林直美
2. 発表標題 ニュースのジェンダー・バイアス：東京オリンピック2020から考える
3. 学会等名 外国語教育メディア学会中部支部第98回大会（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 小林直美
2. 発表標題 SNS時代におけるオリンピック報道：選手のダイバーシティはいかに表象されたか
3. 学会等名 北九州市立男女共同参画センター・ムーブ第22回ジェンダー問題調査・研究報告会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小林直美
2. 発表標題 オリンピックニュースとジェンダー：日本の報道傾向と問題点
3. 学会等名 2019年度人権問題研究会公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 中正樹・日吉昭彦・小林直美	4. 発行年 2023年
2. 出版社 国際テレビニュース研究会	5. 総ページ数 218
3. 書名 東京オリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道	

1. 著者名 小林直美（編著者：石川有香）	4. 発行年 2020年
2. 出版社 学校教育出版	5. 総ページ数 264
3. 書名 『ジェンダーと英語教育：学際的アプローチ』（第8章「リオオリンピックニュースにおけるジェンダー：内容分析によるジェンダー・バイアスの解明に向けて」を担当）	

1. 著者名 中正樹・日吉昭彦・小林直美	4. 発行年 2020年
2. 出版社 国際テレビニュース研究会	5. 総ページ数 104
3. 書名 リオオリンピック開催期間における日本のテレビニュース報道	

〔産業財産権〕

〔その他〕

小林直美 (2021) 「オリンピックニュースをジェンダー・センシティブに：報道内容と報道される選手の権利」 『エトセトラ』 vol. 6

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	日吉 昭彦 (HIYOSHI Akihiko) (80383313)	文教大学・情報学部・教授 (32408)	
研究分担者	小林 直美 (KOBAYASHI Naomi) (90633834)	愛知工科大学・工学部・准教授 (33934)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------